第５１号　「涙」

第５０号まで、できるだけ音楽に関連したことを書こうと努めてきましたが、正直ネタ切れ状態です。それでも、高校で唯一の音楽専攻の校長として、できるだけ関連づけて書きたいと思っています。拙い文章ですが、お読みいただくと喜びます。では、校長２校目としての「校長室カンタービレ」をスタートします。

美しい音楽を聴いていると、思わず涙してしまうことがあります。人は心を強く動かされたとき、何故涙を流すのでしょうか。

ある研究によると、喜びや悲しみなど、感情の涙を流す動物は人間だけだと言われています。目には見えない心が揺れ動いた時、目に見える形で涙がこぼれる。不思議です。脳医学的な見地から、感情別の涙の成分分析なども進められているようですが、私は科学的な解明はさておき、感情と涙は人間の神秘のまま残しておきたいと思っています。

２０１８年に開催された平昌オリンピックで、小平奈緒選手が優勝を決めた後に韓国のライバル選手に言葉をかけ互いに肩を抱き合い健闘を称え合った姿、高梨沙羅選手のメダルが決まった瞬間にチームメートが真っ先に駆け寄り抱き合っていた姿、他にもたくさんの感動的な場面に出会いました。その中で私が一番涙したのは、羽生結弦選手のフリー演技です。演技自体、本当に素晴らしかった。美しかった。それだけでも感動するものでした。でも、私も含めた世界中の人の心をこれだけ揺り動かしたのは、本番に至るまでの背景やプロセスを、誰もが知っていたからだと思うのです。

羽生選手は２０１７年の１１月に右足首の靭帯を損傷しました。それ以降、練習もままならず、大会に出ることもできず、ほぼぶっつけ本番でオリンピックに臨みました。誰もが、オリンピックには間に合わない、間に合ったとしても完璧な演技はできないのではと不安に思っていたはずです。しかし、彼は王者羽生として見事に演じ切りました。我々は、その瞬間の輝く彼の姿と、それまでの彼の思いに寄り添うことで、大きく感動したのです。つまり、その瞬間に至るまでの彼が抱えてきた複雑な思いを推し量りながら演技を見たからこそ、言葉では言い表せない感動を覚えたと思うのです。

羽生選手自身も演技後の会見で、「けががなかったら金メダルを取れていなかったかもしれません。」と語っています。技術はもちろんのこと、彼の精神力の強さを、私は２３歳の若者に感じました。

私は、これからもたくさんの感動的な場面に出会いたい。人の心を感じることのできる人でありたい。そしてできることなら、自分の心を表現して人の心を揺り動かすことのできる人でありたい、そう思っています。